みくにだより

No.763 令和７年７月１日発行

「知ることの先にあるものは」

今回はまず、「相手の気持ちを知る・想像する」ことをやってみます。１人で初対面の人に自分から声をかけます。意図して声を掛けるのは人生で初めてです。その時の気持ちはどんなものか、想像してみましょう。

ドキドキ、緊張する、言えるかな、聞いてくれるかな、なんて言おうかな、怒られやしないかな……といった気持ちでしょうか。誰もが経験したことありますね。

さて先日、相手の気持ちを知る・想像することにはその先がある、と実感した場面があります。6月13日・14日、年長さんとお泊り保育に行って、現地の食堂で１食目の夕飯を食べていた時のことです。食堂では、ご飯、お味噌汁、おかずのおかわりができます。ご飯、お味噌汁のおかわりをする時は自分で、お皿を持ち、食堂の方に「おかわりをください」と言ってお願いします。わたしは４名の子どもたちと一緒に食事をしていました。

Ａくん　「おかわりいってくる」

緊張した面持ちでチャレンジしようとする姿にわたしは、「がんばれ！」「これは成長のチャンス！」「初めての経験！」「１人の行動から他の子へも連鎖してほしい！」と願いがあふれ、わたしはあえて友だちの様子に注目するような声をかけました。「（あえて小声で独り言のように）言えるかな～がんばれ～」。それがうまくいき、残った３人の子どもたちの注目を向けることに成功。その後わたしの出る幕はなく、にやにやと聞いていた、子どもたちの会話をご紹介します。

Ｂくん　「おかわり、はじめてだね」
Ｃくん　「できるかな」
Ｄくん　「あ、いえてそう」
Ｂくん　「あ、もらえたもらえた」
Ｃくん　「ほんとだ、すごいっ」

Ａくんの様子を少し離れたところから実況しています。
Ａくんが戻ってきました。

Ｂ・Ｃ・Ｄくん　「すごいね」（静かに拍手）
Ｂくん　「どきどきした？」
Ａくん　（はにかんだ表情で）「うん」

Ｂくん　「じゃあぼくもいってみる」

そして、見事おかわりをして戻ってきたＢくん。

「ふふ、ぼくもできた」

人の気持ちを知ることで、応援したり、自分も頑張ってやってみようとしたのです。つまり、「知ることの先」がありました。教育、保育はいつ何が成長のきっかけになるかわからないので、深く、面白いです。目が離せません。

「はじめてのおかわり」。この一連の様子に題名を付けてみました。「はじめてのおつかい」という某テレビ番組は有名ですが、おつかいに限らず、色んな場面で、子どもたちのドラマが感情の揺れ動きが見られます。１つの場面を、「子どもにとって」という視点で見ると、子どものおかれている状況から気持ちを想像することができたり、それに共感したり、そうしているうちにその子どもの姿への愛おしさ、重要度が高まって見えます。目だけではなく頭、心をも使うと見え方が変わります。

そしてこのように、保育者として、人として、頭、心を使うことも大事ですが、同時に手を使うことも欠かせません。「わたしたち保育者の手はどぶさらいからピアノまで」。初代園長の言葉です。保育者の手は、トイレ掃除をしたり、泥団子を作ったり、ピアノを弾いたり……子どもたちのために、この手をふんだんに使うことの大切さ、大人の役目を教えられる言葉です。ご家庭でもぜひ、手、頭、心を使って子どもたちと一緒にたくさん遊んでください。お家の方と楽しく遊ぶ、子どもにとってこれほど喜ばしいことはありません。たくさん遊ぶとしつけが入りやすくなる、と言う教育者もいます。わたしも同感です。

大事な乳幼児期の子どもたちと関わるからこそ、自分を律しながら子どもの手本となるように、自分の手、頭、心をしっかり使っていきます。子育て、教育保育は尊いものです。みなさん、毎日本当にお疲れ様です。今年も折り返し地点です！ 時にはついソファでうたた寝をしたり、甘いものを食べたくなったり（誰のことかはご想像の通りです）……自分を許すことも良しとし、自分を労りながら、くれぐれも体調に気をつけてお過ごしください。